

## 5月9日校長講話「お月様が見ているよ」

＜「どろぼうの親子」毛涯章平『ふきのとうの饞別』＞より あらすじ

あるところに泥棒がいました。昼間はごろごろして  
いて夜にお百姓さんが育てた作物をぬすむなどして  
いました。その泥棒には一人の男の子がいましたが、お  
父さんが泥棒であることは知りません。

ある月の明るい夜に泥棒は、男の子に泥棒のやり方  
を教えようとスイカ畑にやってきました。泥棒は、男  
の子に、だれか来たら合図をするように伝えると畑の  
スイカを取り始めました。泥棒が、「だれか見ていない  
か？」と尋ねたとき、男の子は、「誰もいないよ。でも  
お月様が見ているよ。」と答えたのです。

これを聞いた泥棒は、はっとしてかごの陰にかくれ  
ました。やがて取ったスイカを畑に戻し、男の子の手  
を引いて家に帰りました。泥棒はお月様の顔を見るこ  
とはできませんでした。

翌日から、この泥棒は盗みをやめて、毎日せっせと  
働くようになりました。



お話を聞いて、思ったこ  
とを発表してください。

- ・最初は悪いことをしていたのに、畑仕事をするようになって、盗みをやめたので、男の子はすごい。
- ・悪い人だったけれど、いい人になってよかった。
- ・子どもはどろぼうになりたくなくて、お月様が見ているといったのかもしれない。
- ・たった一言でいい人に変えるなんて、すごい。
- ・最初はどんな仕事をしているかわからない子だった。お父さんは、子どもの言葉を聞いて、いい人になったから、ぼくも人の話を聞ける人になりたい。
- ・子どもはお父さんのやっていることをいやだと思って、そう言って、いい人になったからよかった。

発表してくれた人たち、ありがとう。校長先生が思ったこともお話しします。

お月様は、泥棒の心の中にあるもう一人の自分だったのかなと思いました。もう一人の自分が、「泥棒なんかしてほんとにいいのかい」「そんなことしてて恥ずかしくないのかい」そんなもう一人の自分の声を聞いて、「こんなことをしていちゃいけない」って思ったのではないのでしょうか。そして、校長先生もお月様のようなもう一人の自分をいつも心の中に持っていたいと思いました。

みんなの思ったことを担任の先生や校長先生に話してくれるとうれしいです。